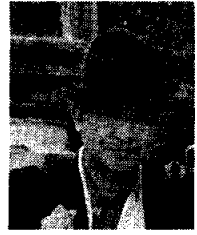


《森は海の恋人》

小 暮 得 雄



◇…年甲斐もなく、相撲で脚を痛めてから、通勤には車をつかうことが多い。昨年の春さき、通いなれた途すがら、ふとR観光の社屋を見あげると、〈森は海の恋人〉と書かれた大きな垂れ幕が目にとまった。観光会社の宣伝としては、意表をつくキャッチフレーズである。何となく芒洋と、さわやかな印象を受けながらも、不敏にして、その由来を知らずにうち過ぎていたところ、たまたま聴いたラジオや新聞のコラムで、その辺の消息に接することができた。

◇…大自然の摂理にしたがい、森は水をたくわえ、落ち葉や腐植土を堆積する。その豊かな養分を川がはこぶ。海辺の生き物たちはこれを糧として育ち、かぐわしい森の匂いをかぐ。“森は海の恋人”というわけである。宮城県で牡蛎（かき）の養殖に携わる人々は、この言葉をモットーとして植林活動に励んでいるという。

豊饒の海—。森に熱い思いを寄せるラブコールの発信者が、すべてを包みこむおおらかな海であるところが実にいい。久しぶりで、眼から鱗の落ちるような思いを味わった。

◇…この世の森羅万象、あらゆる自然の要素は、たがいに密接に関連している。森と海の関係についても、しだいに解明が進んできた。たとえば日本海北部に見られる海やけ現象の遠因が森林の乱伐であることは広く知られている。森は豊富な養分を川に供給するばかりでなく、水量や水温の安定に寄与し、生き物の棲みややすい日陰をつくる。有機物をたっぷり含んだ河川の浄水が、コンブの成熟に好影響をもたらすという知見なども、最近の研究成果といえよう。この種の認識が深まるにつれて、道内漁業関係者のあいだで、植林や緑の回復運動が着実に拡がりつつあることは、歓迎に値する。

森林の恵沢は無限である。小鳥の囀りを聴きながら、清浄な森の空気を深々と吸いこむとき、どんなに身も心もリフレッシュすることか。森は牡蛎や海だけの恋人ではなく、生きとし生けるもの、すべての母であり、恋人にほかならない。

◇…その森が危ない。あいつぐリゾート開発や草地の造成によって、毎年5千ヘクタールをこえる道内の森林が失われている由。あるイベントで、「森は死んだ」という倉本聡氏の壮烈な詩を聴き、その想いに共感した。森が死ぬことは神々の遊ぶ庭がなくなることである。森が減びることは、神を失うことである。恋人が傷つき、死んでゆくのを、どうして黙視できるだろうか。

◇…一方では海の汚染も進行している。きれいな海は、たぶん、森にとっても“恋人”だろう。豊饒な森と海。願わくは、いつまでも相思相愛の間柄であってほしい。

こぐれ とくお

本協会会長、北法学部教授。専攻は刑事法学。深い森が好きで、折にふれて野幌原始林の散策を楽しむ。ほかに、日本自然保護協会評議員、オホーツク自然の村評議員長など。